

3P-039

終末期における緩和ケアの現状分析-管理栄養士の関わり-

○橋本 賢¹⁾, 森 茂雄²⁾

¹⁾美作大学短期大学部栄養学科, ²⁾JA 愛知厚生連 稲沢厚生病院 栄養科

【目的】我が国において、死因が第一位であるガン終末期における緩和ケアは重要な役割を担っている。平成30年度からの診療報酬改定においても、ガンだけでなく心不全患者においても緩和ケアへの重点がおかれている。緩和ケアにおける栄養管理は、食べたい食事を提供するといった事例が多いが、緩和のために投与される薬剤の使用に合わせた対応を必要とし、栄養管理も同様に容態に合わせる必要があるが、管理栄養士の関わりについて更なる検討が望まれる。今回は、終末期の緩和ケアにおける栄養管理の現状を把握することとした。

【方法】終末期の栄養ケアに関する講習会に出席した54名の管理栄養士を対象に、勤務する施設における終末期栄養の現状についてのアンケートを実施した。回答者内訳は、男性4名女性50名、平均年齢は35±8.6歳であった。

【結果と考察】回答者の勤務先は、病院18名、施設35名で、実務経験平均年数は8.7±7.5年であった。終末期栄養ケアへの関わり状況は、よく関わっている19名、関わったことがある21名、ほぼ関わらない3名、関わったことがない6名、これから関わる6名であった。現在のケアチーム参加状況は、参加している18名、参加したことがある5名、参加していない20名、これから参加する4名、わからない7名であった。経口摂取の継続の判断として望ましいと思う方法については、本人・家族の希望に沿って継続が33名で最も多く、次いで本人の尊厳を配慮して最後まで継続19名であり、管理栄養士の提案で継続すると回答したものはなかった。現実の対応状況については、本人・家族の希望に従って継続が23名で最も多く、ついで主治医の指示で継続15名、管理栄養士の提案による継続は2名であった。緩和ケアの栄養管理は、体調と栄養代謝状態に合わせた栄養素の選択が必要であるにも関わらず、管理栄養士の提案が少ない現状であることが推察された。